

## 論 文 要 旨

【学位論文題目】 「バレエ振付演出家小牧正英（1911-2006）研究 ～バレエ・ルッスの日本への導入をめぐる～」

【氏 名】 糟谷 里美

### 【要 旨】

本研究は、戦後日本バレエの発展に寄与したとされるバレエ振付演出家小牧正英（1911 - 2006）について、その芸術活動の視座および活動の背景を明らかにすることで、日本バレエにおける小牧の再評価を試みることを目的とする。

戦後から現在に至る日本バレエ史におけるこれまでの小牧に対する評価は、総じて「日本バレエの発展にパイオニア的な存在として寄与してきた振付演出家・教師・ダンサー」とまとめられる。しかし、小牧の帰国以前の活動に目を向けると、小牧のバレエとの関わりはディアギレフの〈バレエ・ルッス〉を紹介した大田黒元雄の著書『露西亞舞踊』との出会いに始まり、帝政ロシアのシステムに準じた〈ハルビン音楽バレエ学校〉での学び、白系ロシア人を中心とした〈上海バレエ・ルッス〉での活躍というように、ロシアのバレエとの関わりを否認しない。特に、〈上海バレエ・ルッス〉が〈バレエ・ルッス〉に関係したダンサーや〈マリインスキー劇場バレエ団〉出身のダンサーを中心に構成されていたことを鑑みると、「バレエ・ルッス」が〈上海バレエ・ルッス〉を経由し、小牧を介して本格的に日本に導入されたとも考えられる。

これまでの小牧に対する認識や評価は、戦後の小牧の活動にのみ焦点が当てられてきたことによるものであったが、「バレエ・ルッス」の日本への導入という視点で小牧の戦後の活動を捉えなおすことは、これまで単に「日本バレエの発展に貢献した」とされる人物像から一步踏み込んで、「バレエ・ルッス」の本格的導入によって日本バレエを発展に導いた人物として再評価を行なうことになる。

そこで本研究では、これまであまり触れられることのなかった小牧の生い立ちから帰国以前の小牧の活動を丹念に辿ることで、その芸術活動の視座を探り、さらに〈バレエ・ルッス〉および〈上海バレエ・ルッス〉との関わりを踏まえながら、小牧の戦後の活動の背景を明らかにし、日本バレエにおける小牧の再評価を試みる。本研究においては、小牧が居留した中国ハルビンと上海の現地新聞記事、公演プログラム、戦後の新聞・雑誌記事、写真資料、戦後小牧自身が執筆した著作や寄稿文、対談記事等を一次資料として考察を進めた。

第一章では、小牧の岩手での生い立ちから東京を経て、ハルビン、上海での帰国以前の活動に注目した。小牧は、『露西亞舞踊』の絵や写真に魅かれて画家か舞踊家を目指したが、ハルビンでは〈バレエ・

ルッス)のルーツでもあるロシア人とその文化に囲まれた環境の中で、バレエを学ぶ。その後〈上海バレエ・ルッス)で『露西亜舞踊』の絵そのものを自ら踊り、本の世界を体現する。その活動を通じて小牧は、「民族の超越」「民族への回帰」という両極の視座をもつようになったことが導き出された。

第二章では、「バレエ・ルッス」像を概観した上、〈上海バレエ・ルッス)との関連をみた。その結果、〈上海バレエ・ルッス)の上演作品には〈バレエ・ルッス)の作品のみならず、〈マリインスキー劇場バレエ団)の作品が多く含まれていた点に相違があったものの、〈上海バレエ・ルッス)が〈バレエ・ルッス)の特色を内包していることが導き出され、さらに小牧が〈上海バレエ・ルッス)の中に〈バレエ・ルッス)を捉えていたことが示唆された。

第三章では、小牧が帰国する以前の日本バレエの歩みを概観した。帰国時の日本バレエは、本格的なバレエ作品の上演には至っていないが、少しずつではあるが「バレエ・ルッス」が受容されていた様子が窺えた。

第四章では、小牧の帰国後の芸術活動に焦点をあて、「バレエ・ルッス」の日本への導入をめぐる活動の様相について検討した。戦後小牧が目標としたのは、〈上海バレエ・ルッス)で体現したロシアのバレエを日本に導入するというよりは、あくまでもバレエ作品の紹介とバレエの普及であった。しかし、小牧が〈上海バレエ・ルッス)を理想として、西洋の文化であるバレエを媒介として「民族を超越」し、日本の題材や人材を通じて「民族への回帰」を図ることを目指し、そのために、どのようにバレエを日本人の中に取り入れていくかという模索を行なったことは、結果的に、小牧が〈バレエ・ルッス)の多くを導入することに繋がったと考察された。

以上のことから、戦後の日本バレエの発展において小牧が果たした役割について考察すると、小牧が振付演出家とダンサーとの両立に加え、演目の選出、日本の劇場への適応、運営資金の調達、ダンサーの技術向上等、制作や指導の面でも大きな役割を果たし、多面的な工夫によって「バレエ・ルッス」を導入することで、日本のバレエ界を牽引し、日本におけるバレエ発展の歴史を形作る立役者の一人となったと考えられた。このような多面的な工夫による「バレエ・ルッス」の本格的導入は、戦前の海外舞踊家や文字による〈バレエ・ルッス)の紹介や、材料として取り入れられた〈バレエ・ルッス)の部分的特質の舞台化等には見られないことであり、また小牧は、どのような作品を、どのようなタイミングで、どのように上演していくかを複眼的に見極めていた。したがって、まさに〈バレエ・ルッス)の多面的導入によって複眼的にバレエ開拓をすすめる、その活動の根幹には「民族の超越」「民族への回帰」を置き、日本の風土に馴染ませながらバレエの定着に尽力し、日本バレエを発展に導いた点に、日本バレエのパイオニアとしての小牧を再評価できよう。